

アポムネーモネウマタ

——竹市先生誄歌

平成二年度土曜一限、A号館（現・吉田南総合館）一階大教室。主なき教壇はぼつねんと無聊を託っている。その講義は毎回、何時始まるのかがさっぱり解らなかった。そしてそもそもその日の授業があるのかどうかさえも。

俄然、ぬつと壇上に先生の巨軀が現れる。「遅れてすみません。重要な案件で電話が長引きまして」。遅刻の弁解ではない。出し抜けに先生は哲学をされている。現代世界の問題点から説き起こし、それらに対して答える術を知らぬ哲学の「救い難い」現況に説き及ぶ。今日の京大の哲学の「目を覆わんばかりの」惨状を先生は嘔んで吐き出すように痛罵される。この窮状の打開こそが我々の歴史的使命に他ならない。そう揚言される口吻はやおら熱を帯びる。「そこで来年度から新しい大学院が出来ることになったわけです。愈々計画も大詰めで、電話が引きも切らずに鳴って困っています」。

私は中国文学に興味があり、吉川幸次郎先生の遺風を慕っ

安 部 浩

で文学部に入った一回生であった。竹市先生の哲学概論を取ったのは、ものはずみであった。そのような私に哲学の何たるかが解る筈はなかった。しかし、それが「講義の間、講壇の上」という特定の時空に限局される制度的なものではなく、不斷に随所で活潑潑地に哲学をすることであるらしいということ位は、自ずと感得されたのであった。

先生が教場に持つてこられたのは一冊の本だけであった。それは所定の教科書であり、御自身も編集に当たられた『哲学とはなにか』という書物であった。先生は専ら序論を講解された。まずその一部分を先生は朗読される。他人の初見の文章を嘔み締めるかの如く御読みになる。この序論は御自分が執筆された箇所である筈なのに。次いで先生は黙り込まれる。私が想い出すのは、黒板に向かって左手にある窓を見上げながら沈思しておられる先生の御姿である。窓から射し込んでくるのは、記憶の中では決まって春の朝の光。ひさかた

のひかりのどけき皐月晴れ、先生は虚空を仰いでおられる。眼鏡の玉を炯々と光らせながら。

その憑かれた御様子は人間離れしていた。蛙のようであった。「蛙」というのは当時耽読していた小説の一節からの連想である。「おお、蛙——あの四つの足で這いまわり、凝つと身構えると、眼をぐつと中空へ見上げる蛙ですよ」。壇上で長考する先生の孤影から片時も目が離せなくなっていた。大教室は森閑としている。私も息を詰め、臨戦体制を取り続けている。今ここで将に生まれ出でんとしている思想の誕生に立ち会う為に。後にも先にも一回きりの思想をその生成の只中で、それが刻々と生じ来たるが儘に書き留める為に。

否、それは思想といったものではない。私が目の当たりにしたのは、考える人であり、その人において、否、その人として具現化されている自ら考えることであつた。私は専ら文学に関心があり、将来は文士になるつもりでいた。だが今日前において実地で試みられている営為、これが哲学だとしたら……。「文学と哲学はどう違うのか」という愚かな問いに私は囚われることになった。翌年度、二十歳の私は、前述の心酔の書である『死霊』の著者、埴谷雄高先生を吉祥寺まで御訪ねし、清水の舞台から飛び降りる気で存念の疑問をぶつけた。埴谷先生の御答えはこうであつた。「三十五才までは哲学をしなさい」。その次の年度限りで私は文学部を退学した。新年度から竹市先生の所謂「新しい大学院」に進み、先生の許で哲学を研究する為に。

話柄を先生の学問に転じたい。卑見によれば、竹市哲学に

は相互に関連しあう根本問題が二つあつた。我々の経験的現実の全体像の解明と、寸断されて断片化した経験の再統合がそれである。先生が「根源的日常性」や「個体」や「魂」を議論の俎上に上せられたのは蓋し、前者の問題との関連においてであつた。また後者を中核とする問題系では、「近代文明」や「ニヒリズム」や「技術」が幾度となく討究された。近代文明の高度な発展の礎であると共にそれを破壊に追い遣る元凶たる「欲望」の二面性を冷徹に記述された先生。足下の歴史的境位を正視し、近代文明における欲望の自己目的的な暴走を無責任に肯定することにも、頭ごなしに否定することにも、将又高尚な宗教的境地から肯定即否定することにも肯んじなかつた先生。我々の経験的現実の総体の中に然るべく位置付け直すことで、欲望を相対化し、それを忍耐強く「立ち枯れ」させる道を説かれた先生。このように竹市哲学は、経験の現象学的分析に根差した「下から」の哲学であり、自らの世界経験の地平の歴史的有限性に対して能う限り自覚的であろうとする解釈学的哲学であつた。

「徹底的にやらかなあかんのや」と先生はよく言われた。これは一点一画をも揺るがせにせぬ地道な研究態度の礼讃ではない。その真意は枝葉末節に拘うことなく、肝心要な点をどこまでも追究する「単純化」の唱道にあつた。自説の弁明に終始せねばならぬ学術書や論文の執筆は先生にとつて、「無知の知」に倅る迂路でしかなかったに相違ない。事実、先生は書かれず、話された。いかなる事柄であれ、当該の事柄はそれ自体として何であるのかという一事を巡って問答し続け、

著作を何一つ遺さなかつたアテーナイの先哲の如く。

先生は怖い。単純化に賭けた仰せは迫力に満ち、寸鉄人を刺す吟味と情け容赦のない叱責は何人をも追い詰めた。しかるにアドルノは言う。「哲学は最も厳粛なものである。とはいえそれが再度又もやそれほどまでに厳粛であるかと言えば、そうではない (Philosophie ist das Allernächste, aber so ernst auch wieder nicht.)」。哲学の「無知の知」もまた当の知そのものに対しては無反省な儘に留まっております、従つてそれ自体、高階の「無知の無知」に他ならぬことをこの言は道破している。トラキアの少女に嗤われるべき哲学の特権意識。依怙地に毒杯を仰いでみせた、かの先哲と同様に、至純なる哲学の精神に殉じられた先生のような方でさえも、否、まさにかく殉じられたのであればこそ、哲学者の右の倨傲と独善を遂には免れえなかつたのではないか。

「君、何言つとるんや!」。妄言は言下に一喝されるのが落ちである。遮莫、哲学の栄光と悲喜劇を一身に体现された先生は、不世出の哲学者であつた。